



高校生の異文化理解についての意識とその変化について

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 亮輔, 市川, 瑞葵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000097

高校生の異文化理解についての意識とその変化について

佐藤 亮輔・市川 瑞葵*

北海道教育大学札幌校英語学研究室

*北海道札幌東豊高等学校

Awareness of High School Students on Intercultural Understanding and its Changes

SATO Ryosuke and ICHIKAWA Mizuki*

Department of English Linguistics, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

*Hokkaido Sapporo Toho High School

概 要

『高等学校学習指導要領』（文部科学省（2018a））では、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」ることが求められている。『高等学校学習指導要領解説』（文部科学省（2018b））によると、ここにはその目標として、その学習活動を通して「他者に配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てること」も含まれる。

しかし、現行の高等学校外国語科（英語科）では独立した科目として「異文化理解」は設定されておらず、高校生がどの程度、上記の精神を獲得しているのか明らかではない。

そこで本研究では英語科の授業内で、はじめに高校生にアンケートを行うことで、現状の異文化理解への意識調査を行った。その後、異文化理解へと繋がる画像を用いた教材を取り上げ、さらにアンケート調査を行った。このことによって、生徒の異文化に対する理解度や態度がどのように変化するかを調査した。

1. はじめに（文責：佐藤）

『高等学校学習指導要領』（文部科学省（2018a））では、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」ることが求められている。『高等学校学習指導要領解説』（文部科学省（2018b））によると、これは単に外国語の文化的背景についての理解を深めるだけでなく、その学習活動をとおして「他

者に配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てること」も目標とされている。

しかし、現行の高等学校外国語科（英語科）では独立した科目として「異文化理解」は設定されておらず、高校生がどの程度異文化への理解を深め、他者への寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得しているのか明らかではない。

そこで本研究では英語科の授業内で、はじめに高校生にアンケートを行うことで、現状の異文化理解への意識調査を行った。その後、異文化理解へと繋がる画像を用いた教材を取り上げ、さらにアンケート調査を行った。このことによって、生徒の異文化に対する理解度や態度がどの程度変化するかを調査した。

本稿の構成は次のとおりである。次節では、先行研究の概観を行う。第3節では調査対象である生徒の特徴を述べる。第4節では具体的な調査方法を示し、第5節でその調査結果とそれに基づく考察を行う。第6節で本稿を締めくくる。

2. 先行研究 (文責：佐藤)

これまでに、武井他 (2020)、吉留・池田 (2019)、上西 (1997) など、高校生・高専生・大学生に同様の調査を行った研究が存在する。しかし、これらの研究で行われた調査は異文化理解よりも言語習得の面にフォーカスされていた。また、異文化理解の面にフォーカスが置かれていた場合でも、異文化理解を扱った授業後の意識変化については調査されていない。

3. 調査対象 (文責：市川)

調査対象は、札幌市内のA高等学校1年生116名のうち、「英語コミュニケーションI」の授業に参加した91名である。生徒の特徴としては、全体的に基礎学力が身につけておらず、中学校1年生で習うような英単語が全く読めないような生徒もいる。語彙のレパートリーが少なく、自分の気持ちを言葉にすることが難しい生徒が多い。そのため、この活動を通して、自分とは違う他者のことを受け入れる態度の変化を見ようとしたものである。今回の調査で話し合う際には、言葉の使い方に気を付けて、人を傷つけるような言い方はしないこと、その上で素直な気持ちを話してほしいと伝えた。

静かに座って話を聞くような場面は苦手だが、

体を動かして行う活動や話し合いは協力的に行ってくれる。

4. 調査方法

4.1. 調査の意図と調査項目 (文責：佐藤)

本研究では、最初に異文化理解度を測るアンケートを行い、次に異文化理解を促す授業を行った。そして最後にもう一度アンケートを行い、どの程度異文化理解度が深まったかを検証した。

この調査の意図は2つある。1つは、日本で常識として考えられていることと異なる文化があることに気づいてもらうことである。もう1つは、「異文化理解」とは本質的には「他者理解」に繋がることに気づいてもらうことである。特に2つ目の意図については、Jackson (2020) といった大学の異文化理解のテキストでもしばしば言われていることである。文化には見方、考え方、価値観、価値志向についての内面的文化要素と、精神文化、生活文化についての外面的文化要素がある (瀬田 (2007)) が、本研究では内面的文化要素についての意識およびその変化についても調査対象としている。

実際に使用したアンケート項目は、下記1~20の項目である。

1. 外国の人が怖い。
2. 金髪の人是不真面目だ。
3. タトゥーを入れている人が怖い。
4. 男性と男性が手を繋いで歩いているのを見ると違和感がある。
5. 男子学生はズボン、女子学生はスカートを履くべきだ。
6. ネックレスは女の人にするものだ。
7. メイクは女の人にするものだ。
8. 体の不自由な人は、そうでない人と同じ生活を送ることはできない。
9. 男の人の髪の毛は短くあるべきだ。
10. 異文化理解とは外国人理解のことである。
11. 外国人を見かけたら英語で話しかけるべきだ。

12. 自分と考えが違う人とは友だちになる必要がない。
13. 人前で抱き合うのは恥ずかしい。
14. 日本語よりも英語の方が優れた言語だ。
15. 言われなくてもその場の空気を読んで行動すべきだ。
16. 友だちを作るなら自分と同じ学校の方がよい。
17. 人の話を聞くとときは、目を見るべきだ¹。
18. 初めて会う人が至近距離で話しかけてきたら不快だ²。
19. 1対1で話をしているときに、無言の時間ができると気まずい³。
20. 友人が理由もなく待ち合わせ時刻に遅れてきたら許せない⁴。

先述のとおり、異文化理解とは他者理解に繋がるものである。異文化間コミュニケーションを行う際には、言語の壁を乗り越えなければならないこともあり、相手の言語能力に合わせて言語活動を行う必要がある。また、非言語表現についても、日本と他国では表す内容が異なり、自国の知識のみに基づいて行うのではなく、常に相手国では異なった意味を表すかもしれないということを念頭に置く必要がある。この意味で、異文化理解とは本質的に他者理解に繋がるものである。こうした内面的文化要素について調査するため、本調査では上記のようなアンケート項目を用意した。

4.2. 実際の授業の様子（文責：市川）

授業では図1に示されるスライドを用いて、2つのシーンを想定してどう思うかを班で考えた⁵。

図1-1 実際の授業で使用したスライド（Scene 1）



図1-2 実際の授業で使用したスライド（Scene 2）



Scene 1は、日本で常識として考えられていることと異なる文化があることに気づいてもらうことを意図している。ここでは、太郎は、留学生のイズラム君と街に買い物に行った。そのとき、太郎は彼から手をつないで歩こうと言われた。このとき生徒にどう思うか尋ねた。このとき、「あなたが太郎くんだったらどう思うか」と、イズラム君とはすごく仲良くなったと想定して考えるように伝えた。

班の意見はGoogle Jamboardを用いてまとめた。

多くの班では、イズラム君のことを「同性愛者」と捉えていた。その上で同性愛に対して肯定的な意見があれば、率直に気持ち悪いという意見もあった。自分だったらどうするかという問いには、「気にせずに繋ぐ」というものや、「少し考える」というような戸惑いを感じさせるような意見があれば、「手のつなぎ方に依る」という声も挙がった。「LGBTQに配慮しなければいけない」という意識はどの班にもあって、「批判的な意見は言うてはいけないんだ」という空気もあった。

終わりに、「同性の仲のいい男性同士が手を繋ぐことは、インドなどで見られる文化で、同性愛者の男性でなくても手を繋ぐことがある」と伝えられると、生徒たちは驚いていた。

Scene 2は、「異文化理解」とは本質的には「他者理解」であることに気づいてもらうことを意図している。このシーンは、ある日の日曜日で、街で会った村田君が化粧をしていたというものである。これについては、想定よりも違和感を感じる生徒が少なかったように思われる。ほとんどの班が、男性が化粧をすることについて肯定的に捉え

ていた。TiktokなどのSNSでよく見かけるといったことが背景にあるようである。「それでも実際に見たことはないので、びっくりすると思うけど、その人の自由だ」という意見が多かった。

以下、授業後の生徒の感想を列挙する⁶。

- 異文化理解=外国人理解だと思っていたが、違うことがわかった。
- 色んな考えがあると思った。
- それぞれ違う文化があるからしっかり理解したほうが良いと思った。
- 思っていた異文化理解とは違った。
- 他の人たちの意見を聞いて、なるほどと思うことがあった。良い意見が沢山あった。
- 手をつなぐのも化粧をするのも自由だと思う。
- 人それぞれだから良いと思うけど、否定的な意見の人もいるんだなと思った。
- 何も感じなかった。
- 自由に生きられれば良いと自分は思った。
- 自分の意見と似ている人がいっぱいいると思った。男性が化粧をしているのを気にしないと書いている人が沢山いて、少し安心した。
- 他人や周りの人を否定しすぎるのはよくないと思った。色んな考えや文化を理解できる人が増えたらいいと思う。
- 人によって考えてることが違うのがはっきりわかって面白かった。
- 男の人同士がハグしてるのを見たら、え?と思うけど、受け入れる。
- 色々な人がいるので自分と違って、それは個性だと思おうと思いました。
- 時代が変わってきているから、あと五年もすれば色々変わっていくのかなと思いました。
- 色んな人を理解することが大切。
- 男の人がメイクしたらダメなんてことはないと思う。
- 今の時代男女関係ない。
- ジェンダーについてあまり理解していなかった。
- 道徳みたいな授業で久しぶりに考えさせられ

た。

- SNSでよく見かけて興味があったのでこの機会に考えることができてよかった。
- 色々な意見があって、自分とは反対の意見もたくさんあった。それぞれの考えで良いと思う。
- その人の勝手だしどうでもいいと思う。
- 手を繋ぐのは仲良くないとしたくない。仲良ければ構わないし、距離感による。
- 否定的な意見があるのに少し驚いた。
- 異文化理解をやって他の国の文化を知りたくなった。他の国の文化を知ることも大切だと思った。
- 手を繋ぐのも、化粧をするのも男女関係ないと思う。
- 色々な文化を理解して、外国人とあったときに偏見のないようにしていきたい。
- 生き方は人それぞれなので、その人が嫌味を言う人とかに耐えられるなら自分が好きと思うようにしたらいい。
- 色々な考え方があった。肯定的な意見も否定的な意見もあって色々考えることができた。
- 国によって文化が違うから、日本だと当たり前なのにほかの国ではそうじゃなくて、またはその逆もあってまだまだ異文化を理解しているとは言えないと思った。
- 今までは男同士で手をつないでいると変だなと思ってたけど、インドでは当たり前なんだなと思った。
- 人それぞれの意見があったけど、異文化を受け入れることが大事だと思った。
- 自分の意見とは違う人が結構いて、きづいたこともあったので、色々な考え方があったなともおもいました。
- 友人だったらびっくりすると思うけど、特に何にも思わない。
- 日本人は外国人と関わる機会が少ない人がほとんどだと思うので、日本語以外の言語を話している人がいるとなんだあいつみたいな目

を向けてしまうのは悲しい。

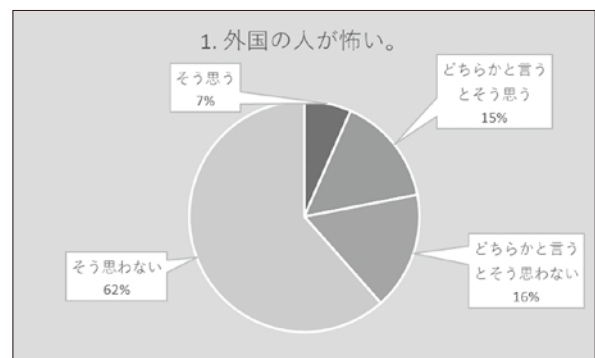
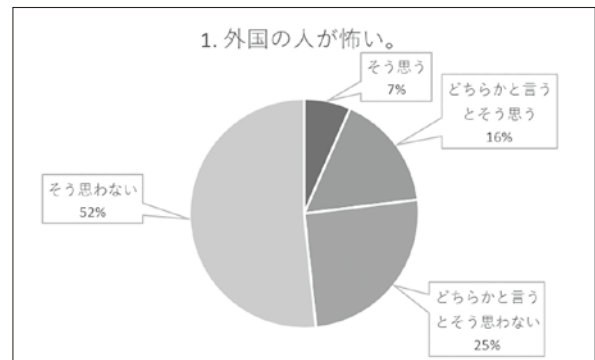
- この授業を受けるまで少しずつジェンダーレスな社会になってきたと思ってたけど、意外と自分の周りにも男同士で手をつなぐのは気持ち悪いなどと思っている人がいると思って悲しくなった。自分や周りの人は受け入れている。
- 今回の活動を通して思ったことは偏見や自分の中に固定概念があること、その人によって考え方が違うし、国によっても文化が違うから理解できればなと思った。
- 人前で手をつなぐのは恥ずかしいから嫌だが、外国人だったら別にいい。
- 差別はよくないとは思いましたが、一人一人違う意見なんだなと知った。
- 手をつないだり、化粧してる人は今はあり得る。特に男の人も化粧する人はいるしなにも気にならないです。手をつなぐのもしたくないならすればいいし不快になるとかは全くないです。
- 色々な意見があるんだなと思った。
- 同じ国の人でも自分とは考えが違う人がいるのは当たり前だから、否定せず「こういう考えもあるのだ！」と新しい考えを取り入れるのが大切だと思った。
- その人がそうしたいなら好きにすればいい。普通にとらわれすぎていると時代遅れになる。早く優しい世界が見たい。
- 人それぞれ考え方や感じ方が違って楽しかった。
- 今まで自分の身のまわりにそういう人がいなかったけど、改めて自分の周りでそういうことがあったらと思うと、難しい問題だと思った。
- LGBTに配慮すべき。
- 全然気にしてない人と、凄く嫌そうにしている人がいて、賛否両論ある感じだった。
- 男同士が手をつなぐのが普通な国もあるのが分かった。
- 今の時代は男の人も化粧する。

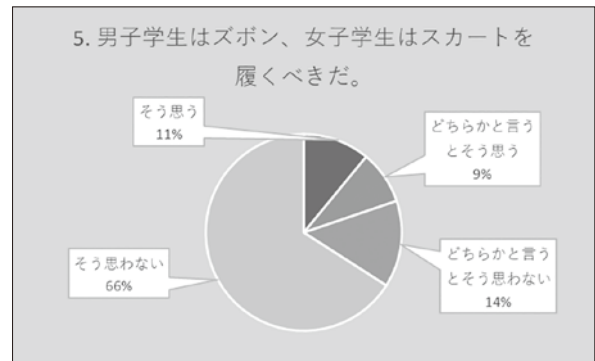
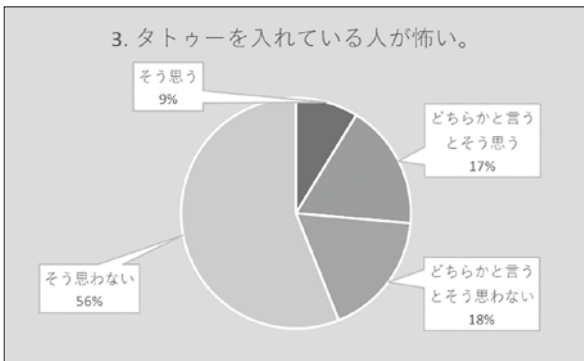
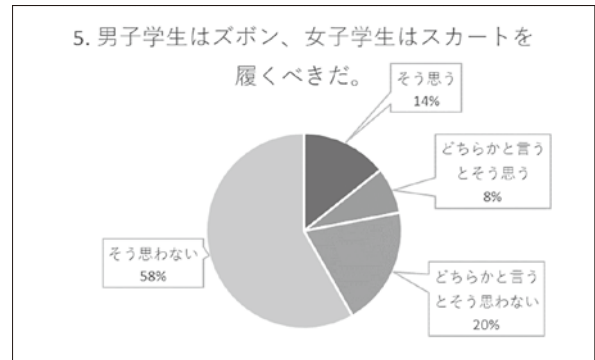
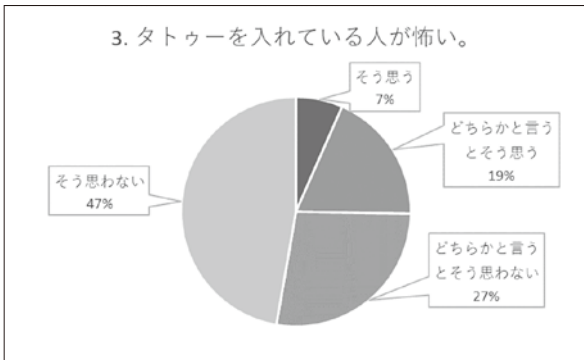
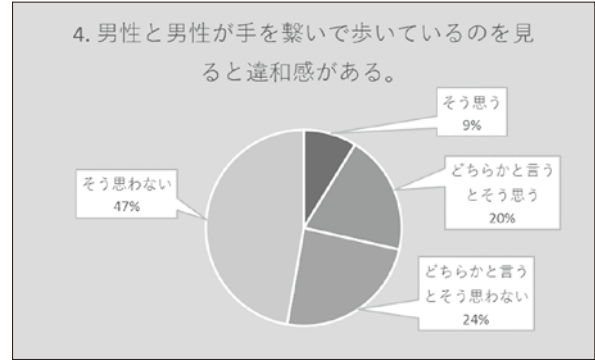
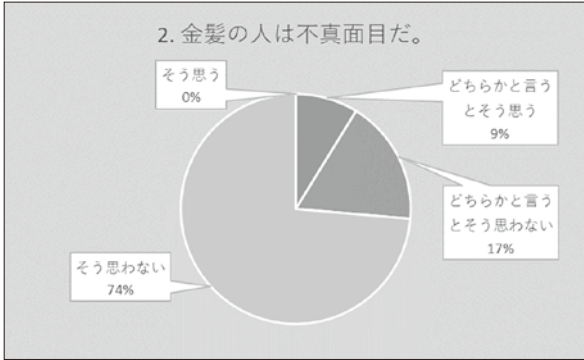
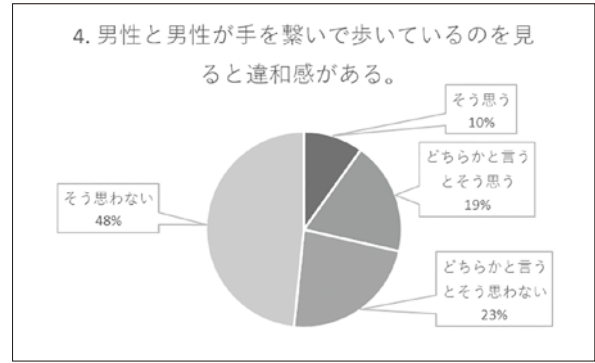
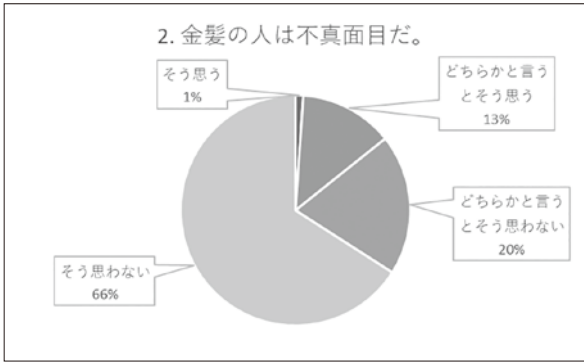
- 普段考えてないことを考えて考え方が変わった。
- 世界には色々な人がいて、一人一人が一緒にわけじゃないと思う。
- 自分の好きにしたらいい。
- 優しさや思いやりのある意見があって、人によって考えが違った。
- 日本でもそれぞれの家によって文化の違いがあると思った。
- 色々な意見を聞いて楽しかった。
- 班では肯定している人が多かった。
- 人それぞれしたいことや文化の違いがあるのは仕方ない。

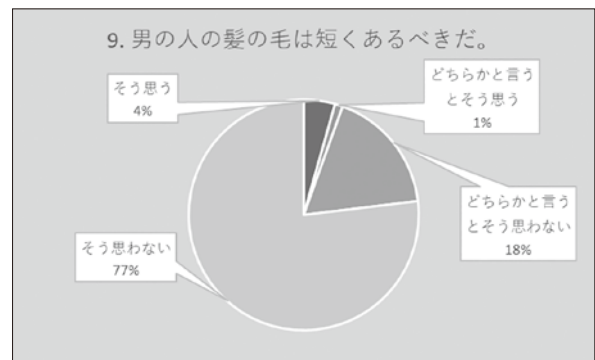
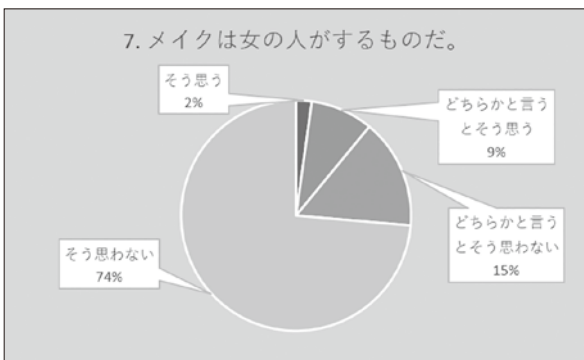
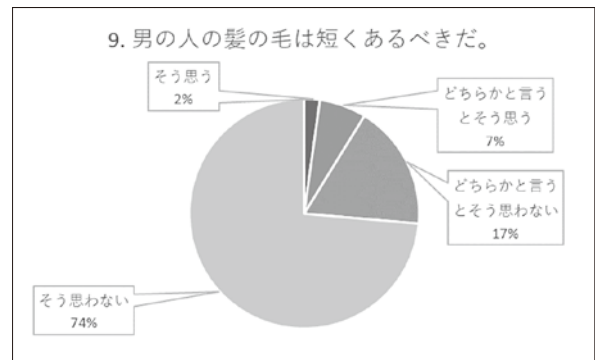
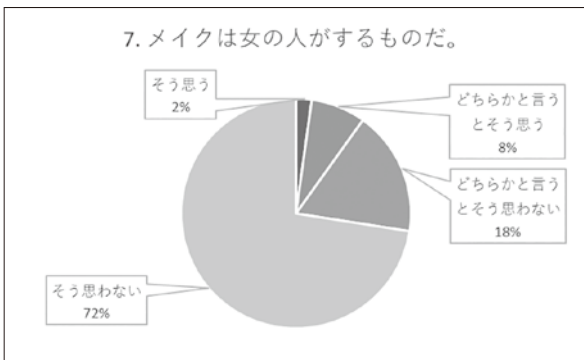
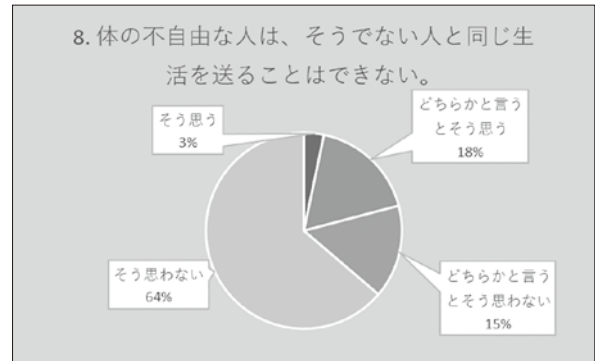
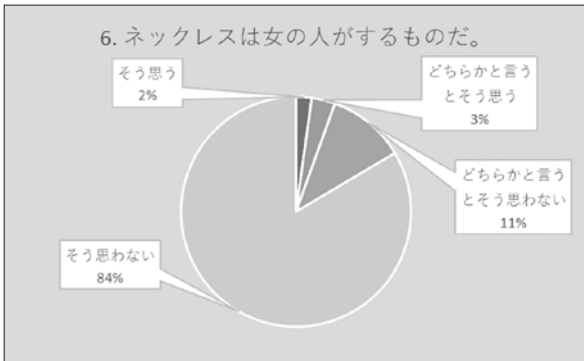
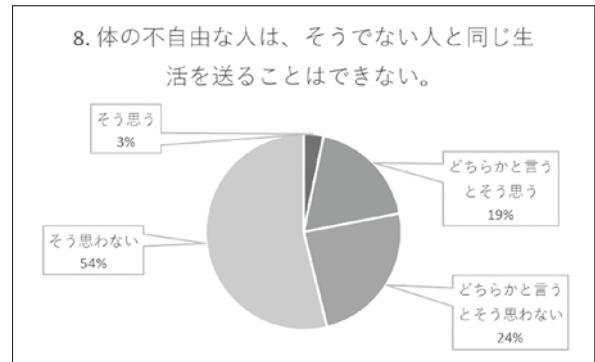
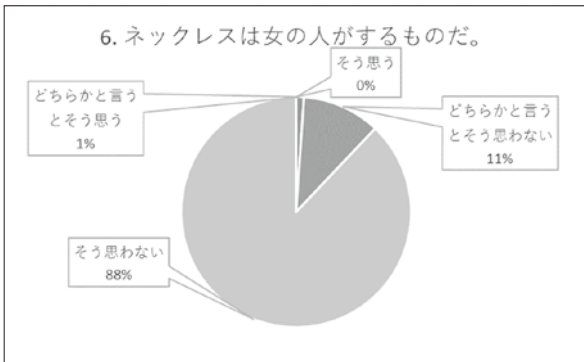
5. 調査結果と考察

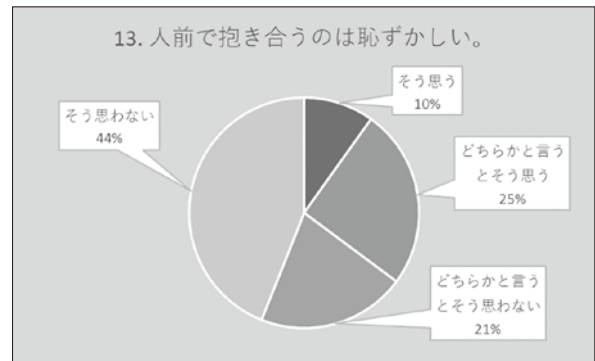
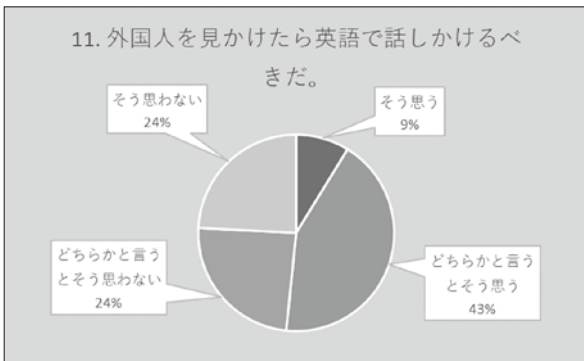
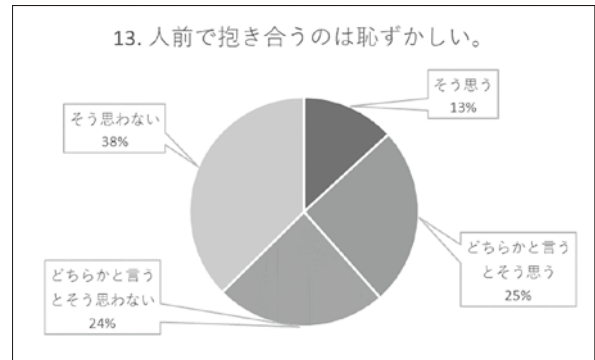
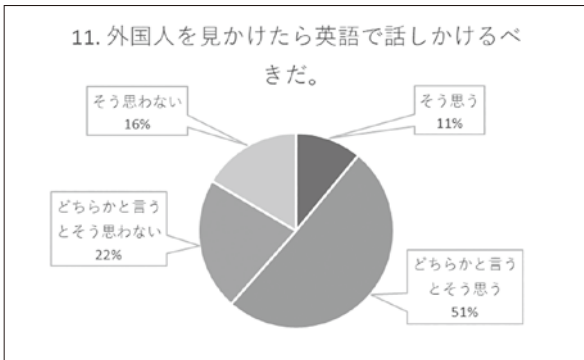
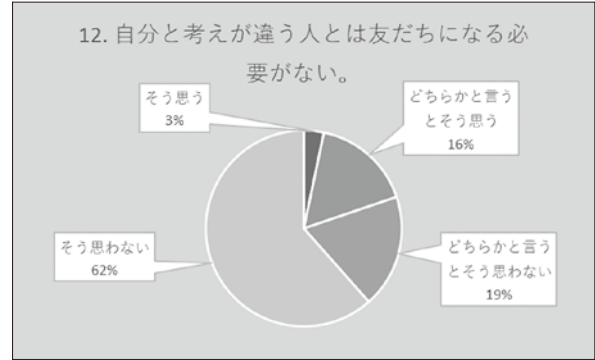
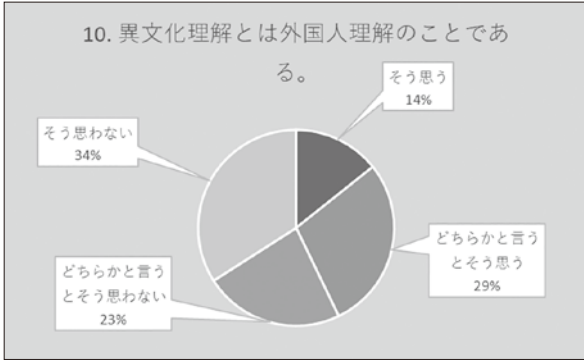
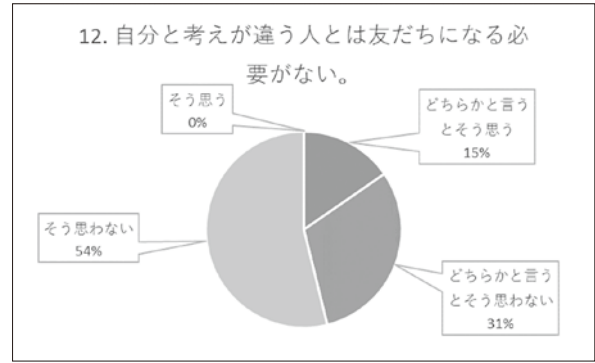
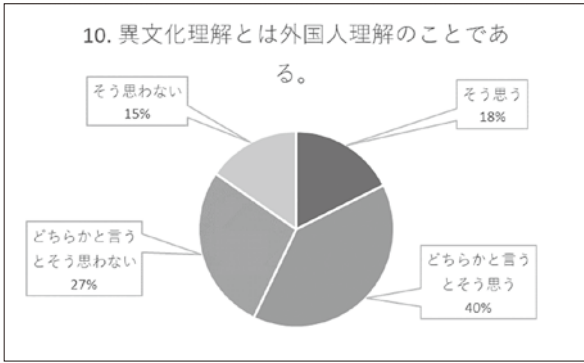
アンケートの調査結果は、図2のとおりである。それぞれのグラフについて、白枠のグラフが授業前の、網掛け枠のグラフが授業後のアンケートを集計したグラフである。

図2 調査結果

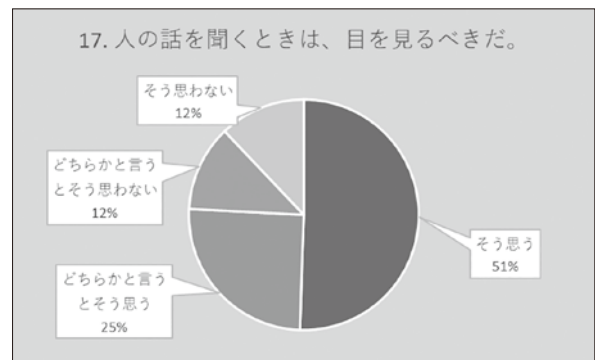
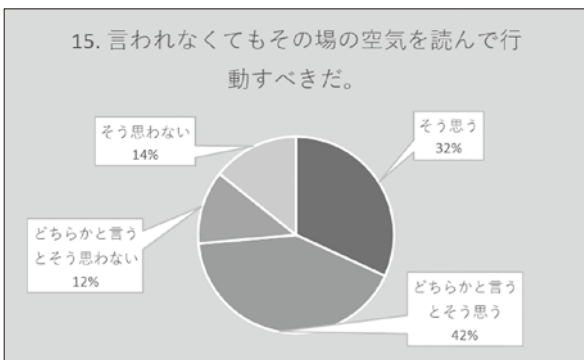
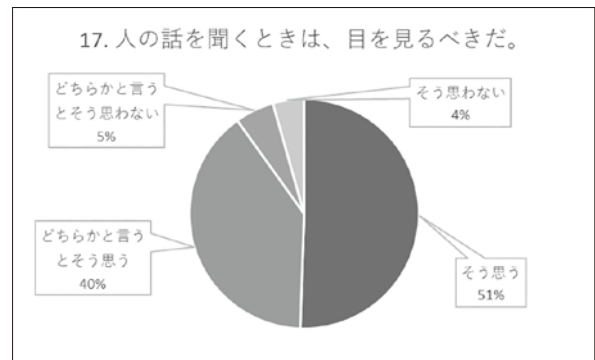
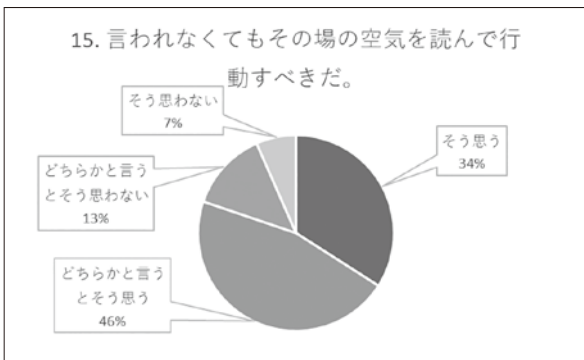
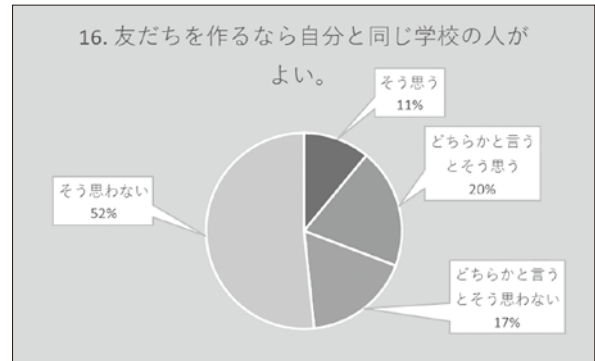
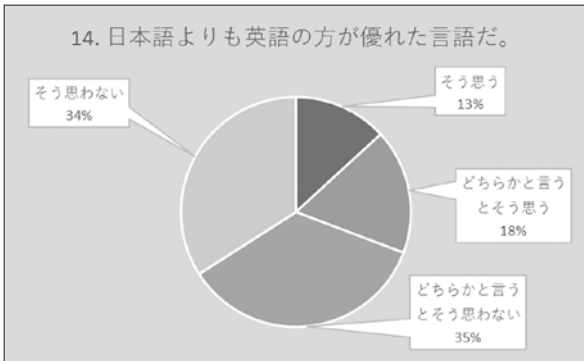
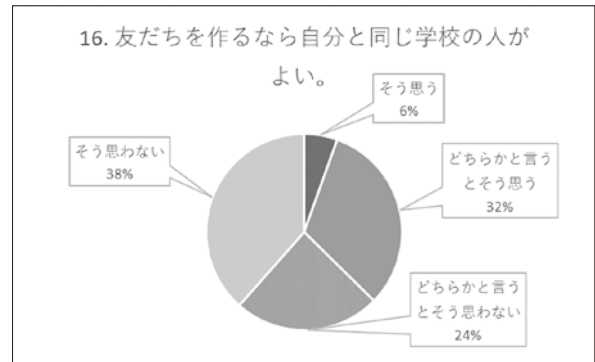
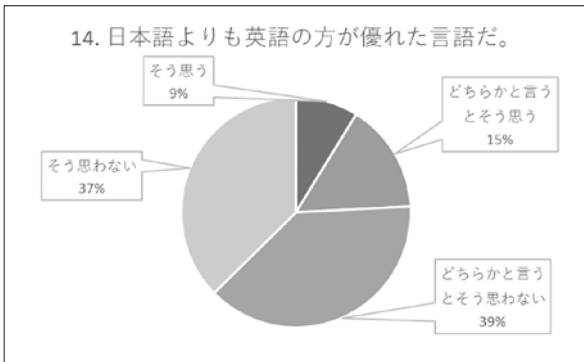


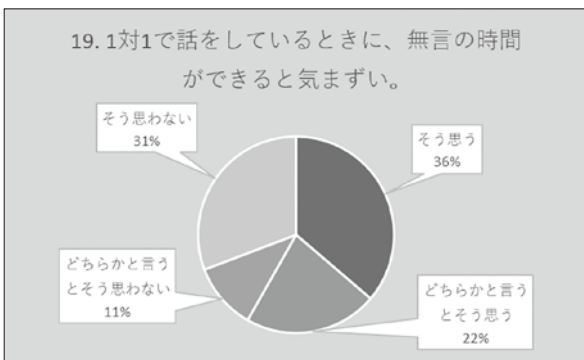
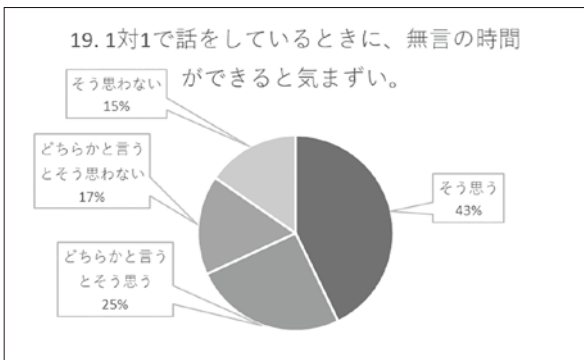
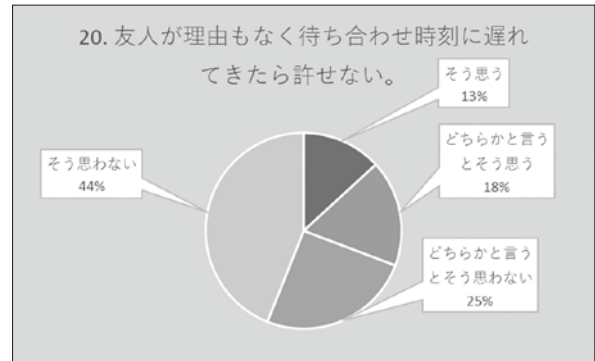
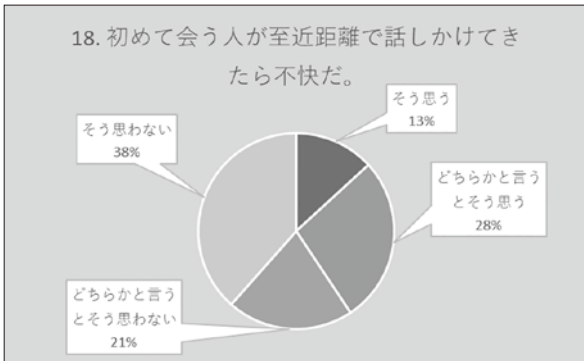
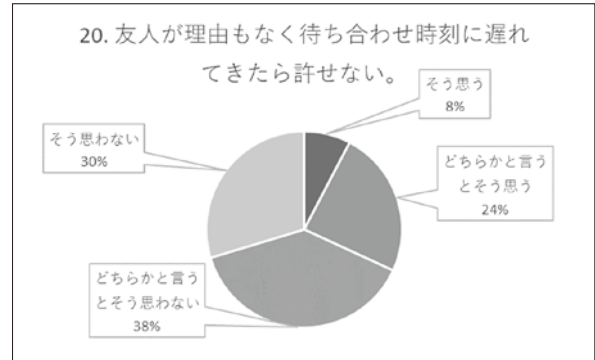
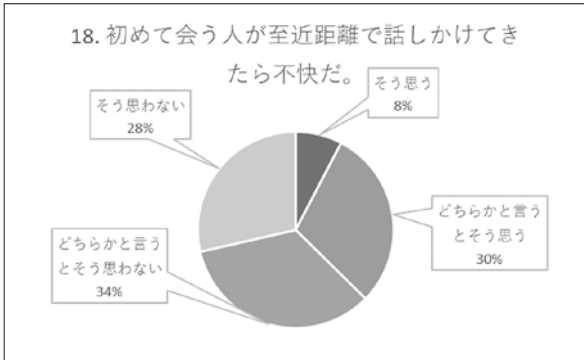






高校生の異文化理解についての意識と変化について





以下、それぞれのグラフに示されている結果についての考察を述べる。

「1. 外国の人が怖い」については、「そう思う」と「どちらかと言うとそう思う」の割合にはさほど変化がないが、「そう思わない」の割合が10%増えている。これは、SCENE 1で使用したスライドによって、外国文化について多少なりとも理解を深めたことで、外国人への偏見が薄れたためではないかと思われる。

「2. 金髪の方は不真面目だ」については、授業前と授業後で大きな変化は見られないが、「そう思わない」と「どちらかと言うとそう思わない」が合わせて5%増えた。授業によって、多少、多様性を認める気持ちが生じたものと思われる。

「3. タトゥーを入れている人が怖い」については、授業前と授業後で大きな変化は見られないが、「そう思わない」が9%増えている。授業によって、多少、多様性を認める気持ちが生じたものと思われるが、一方で日本の刺青に対する否定的な見方が強く影響していることも読み取れる。

「4. 男性と男性が手を繋いで歩いているのを見ると違和感がある」については、授業前と授業

後で大きな変化は見られない。海外では同性どうしでもハグを行うなど、同性愛者かどうかに関係なく接触が行われることがある。しかし、日本では同性どうしが接触を行うことはまれであり、手を繋ぐこともほとんどない。こうした文化的な違いを認めていくことを授業の目的としていたが、生徒にうまく伝えられなかったようである。あるいは、日本社会に同性愛に対する抵抗が依然として根強く存在していることを示唆している可能性もある。

「5. 男子学生はズボン、女子学生はスカートを履くべきだ」については、授業前と授業後で大きな変化は見られないが、「そう思わない」が8%増えている。授業によって、多少多様性を認める気持ちが生じたものと思われる。

「6. ネックレスは女の人にするものだ」については、授業前から「そう思わない」の割合が高いことがわかる。最近では、そもそも男性でも日常的にアクセサリーを身につける傾向にあり、女性のみがアクセサリーを付けるという意識はないようである。これは、SNSなどによって外国の文化に触れる機会が増えていることが影響しているものと思われる⁷。

「7. メイクは女の人にするものだ」については、授業前から「そう思わない」の割合が高いことがわかる。最近では、そもそも男性でも日常的に化粧をする傾向にあり、女性のみが化粧をつけるという意識はないようである。このことも、SNSなどが強く影響しているものと思われる⁸。

「8. 体の不自由な人は、そうでない人と同じ生活を送ることはできない」については、授業前と授業後で大きな変化は見られないが、「そう思わない」が10%増えている。しかし、肯定派と否定派の割合に大きな変化は見られなかった。本設問は、異文化理解の本質は他者理解であるという認識に基づき、生徒の多様性に対する容認度を調べるために行ったものである。しかし、授業内で障がい者支援などについて詳しく取り扱ったわけではないため、生徒から本研究の意図した回答を引き出すことができなかったように思われる。異

文化理解と他者理解を結びつけ、延いては障がい者への配慮へと繋げていくには、調査手法としてやや強引であったと言わざるを得ず、今後より専門的な研究手法を考慮していきたい。

「9. 男の人の髪の毛は短くあるべきだ」については、授業前から「そう思わない」の割合が高いことがわかる。そもそも今日では男性でも長髪の人が多く、男性が短髪でなければならないという意識はないようである。

「10. 異文化理解とは外国人理解のことである」については、「そう思わない」と「どちらかと言うとそう思わない」が合わせて15%増えている。授業によって、「異文化理解」とは本質的に「他者理解」であることに気づいた生徒が増えたものと思われる。

「11. 外国人を見かけたら英語で話しかけるべきだ」については、「そう思わない」と「どちらかと言うとそう思わない」が合わせて10%増えている。授業によって、「外国人」＝「英語話者」ではないという意識がやや強まったようである。

「12. 自分と考えが違う人とは友だちになる必要がない」については、授業前に「どちらかと言うとそう思わない」と回答していた生徒が、授業後に「そう思わない」と「そう思う」、「どちらかと言うとそう思う」へと分散している。授業で多様性に触れたことで、それを受け入れようと考えた生徒と、あまりに多様性が大きいため受け入れられないと考えた生徒に分かれたものと思われる。

「13. 人前で抱き合うのは恥ずかしい」については、授業前と授業後で大きな変化は見られない。そもそも、最近の10代は公共の場でプライベートなことを行うことにあまり抵抗がないものと思われる。

「14. 日本語よりも英語の方が優れた言語だ」については、授業前と授業後で大きな変化は見られない。そもそも、英語に対するコンプレックスはないようである。

「15. 言われなくてもその場の空気を読んで行動すべきだ」については、授業前と授業後で大きな変化は見られないが、「そう思わない」と「ど

ちらかと言うとそう思わない」が合わせて6%増えている。周囲に気を遣わず、自分の意思をはっきりと示すことの重要性に気づいた生徒もいるようである。

「16. 友だちを作るなら自分と同じ学校の人がよい」については、授業前と授業後で、「そう思わない」が14%増えている。また「そう思わない」と「どちらかと言うとそう思わない」が合わせて5%増えている。授業後に、さまざまなバックグラウンドを持った他者と交流する素地ができたものと思われる。

「17. 人の話を聞くときは、目を見るべきだ」については、授業後に「どちらかと言うとそう思う」が15%減っている。授業でさまざまな文化が存在することを学び、アイコンタクトが表す意味は国によって異なることが認識されたものと思われる。

「18. 初めて会う人が至近距離で話しかけてきたら不快だ」については、授業後に「そう思わない」が10%増えている。授業でさまざまな文化が存在することを学び、パーソナルスペースにも多様性があることに気づいたようである。例えばアメリカは比較的パーソナルスペースが広い国であるが、ラテンアメリカは狭いことが知られている(Jackson (2020: 99-100))。

「19. 1対1で話をしているときに、無言の時間ができると気まずい」については、授業後に「そう思わない」が16%、「どちらかと言うとそう思わない」が6%増えている。授業でさまざまな文化が存在することを学び、コミュニケーションの取り方にも違いがあることに気づいたものと思われる。

「20. 友人が理由もなく待ち合わせ時刻に遅れてきたら許せない」については、授業後に「そう思わない」が14%増えている。授業でさまざまな文化が存在することを学び、時間に対する捉え方にも違いがあることに気づいたものと思われる。

6. 終わりに (文責：前半 市川・後半 佐藤)

今回の授業の生徒たちの声には、話し合いを通じて自分と他人との意見が違うことへの気づきが多くあった。「ジェンダーに関する問題も含めて、まだまだ排他的な考え・否定的な意見が多いことが分かった」などの意見が目立った。一方で「特に何も思わない」という意見も多く、この活動を通して、他者について考えるきっかけになった。意見交流をすることによって自分と違う考えに触れ、それを受け入れるという他者理解への足がかりとなった。

今回のアンケート結果を見たところ、生徒は自分にとっての「当たり前」は当たり前ではないということに気づくとともに、そもそも「異文化とは何か」という認識にも変化があったように思われる。異文化は外国にのみ存在するものではなく、身近に存在する「違い」であるということに気づいた生徒が多いようである。そしてその「違い」を認め合うことが必要であるという学習に繋がったのではないかとと思われる。また、当初の調査目的とはやや逸れるが、男性が化粧をすることについては、そもそも現在の高校生は我々よりも寛容的であり、世代間にも認識の差があることがわかった。しかし、わずかながら本研究の意図と逆行した結果や変化の見られない結果が得られたことも事実である。これらについては、授業とアンケートの結びつけ方に問題があったのではないかと考えられる。そのため、今後の研究では授業手法やアンケート項目の選定をさらに慎重に行い、より正確な情報が得られるように心がけていきたい。本研究が多少なりとも異文化理解の研究と教育に貢献できれば幸いである。

謝 辞

本研究は、北海道教育大学札幌校の研究倫理審査を経て行われている。また、本稿の内容は、日本英語英文学会第32回年次大会(2023年3月4日(土)(オンライン開催))で発表されたものであ

る。同大会でご助言くださった聴者の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。また、本論文投稿時に有益なコメントを下された匿名の審査員の方々に感謝申し上げます。言うまでもなく、本稿の不備の一切は筆者に帰されるものである。

注

1. 例えばアメリカと比較した場合、日本では直接的なアイコンタクトは積極的に使用せず、会話中、話者は相手の喉周辺を見ていることが多い(Matsumoto and Hwang (2012))。本設問は、この文化的違いの認識を調べるためのものである。
2. Hall (1966)によると、人間の空間に対する認識は、文化によって形成され、それは無意識のレベルに内在化される。この問いは、そういった無意識下の文化的違いを明確化するために設けたものである。
3. Jackson (2020)によると、カナダ北部の先住民族では、友人どうしが無言のまま座っていることが普通に見られる。一方日本では、沈黙は「否認」を意味することがあり、肯定的な行動とは捉えられないことがある。この問いは、この違いへの認識を明らかにするために設けたものである。
4. Berglund (2015)では、時間を認識し、時間に価値を与え、時間を構成し、時間に反応する方法は、コミュニケーション・プロセスに影響を与えると述べられている。特に、文化によって形成される時間的枠組みはHall (1966)の用語でmicro timeと呼ばれる。ラテンアメリカや中東では時間に対して柔軟な傾向が強いが、アメリカやヨーロッパ北部、日本では時間に対して厳密な傾向が強い。本設問では待ち合わせの要件について述べていないため、回答者がどのような要件を想定するかによって、回答が左右される可能性がある。今後アンケート調査を行う際には、この点を留意して質問文を考える必要がある。しかしこの設問でも、時間に対する大まかな認識の傾向は捉えられるのではないと思われる。
5. スライドで使用したイラストは佐藤が描いたものである。
6. 本稿全体で表記を統一するため、句読点をはじめとした記号は筆者が書き換えている。また、明らかな誤字・脱字についても、筆者が修正している。なお、漢字表記の揺れについては修正していない。
7. より詳しく見ると、「そう思う」と「どちらかと言うとそう思う」が微増しているが、この理由はわからない。もし本授業をとおして本研究の意図とは逆の考え方へと導いてしまったのであれば、授業方法を再考する必

要があるかもしれない。

8. 「どちらかと言うとそう思う」の割合が1%増えている。これは、もともと「どちらかと言うとそう思わない」と回答していた生徒が「どちらかと言うとそう思う」に立場を変えた可能性を示唆しているが、その理由はわからない。設問6から得られる示唆と同様に、授業方法の再考を要するかもしれない(注7も参照のこと)。

引用文献

- Berglund, Jeff (2015) "Time (Chronemics)," *The SAGE Encyclopedia of Intercultural Competence*, ed. by Janet M. Bennett, 800-802, SAGE, CA.
- Hall, Edward T. (1966) *The Hidden Dimension*, Doubleday, New York.
- Jackson, Jane (2020) *Introducing Language and Intercultural Communication Second Edition*, Routledge, London/New York.
- 上西幸治 (1997) 「比較文化学習を通しての学習者の変容に関する研究 —情意面を中心に—」中国地区英語教育学会研究紀要 27, 129-134.
- 瀬田幸人 (2007) 「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」岡山大学教育学部研究集録 134, 129-139.
- Matsumoto, David and Hyi-Sung Hwang (2012) "Nonverbal Communication: The Message of Emotion, Action, Space, and Silence," *Routledge Handbook of Language and Intercultural Communication*, ed. by Jane Jackson, 130-147, Routledge, London/New York.
- 文部科学省 (2018a) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』東山書房, 京都.
- 文部科学省 (2018b) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編』開隆堂, 東京.
- 武井光子・谷田部順二・佐渡紀子・隅田姿 (2020) 「異文化間能力Can-Doによる学生の意識調査: 国際教育カリキュラム検証への示唆」広島修大論集 61, 35-51.
- 吉留文男・池田幸恵 (2019) 「本校学生の異文化理解に関する意識調査: 高専1年生へのアンケート調査より」徳山工業高等専門学校研究紀要 43, 7-20.

(佐藤 亮輔 札幌校講師)

(市川 瑞葵 北海道札幌東豊高等学校教諭)

